

天理市埋蔵文化財調査概報

(平成16年度・国庫補助調査)

柳本藩邸遺跡 (第9次)

岩室西遺跡

岸田遺跡

平等坊・岩室遺跡 (第24次)

柳本藩邸遺跡 (第10次)

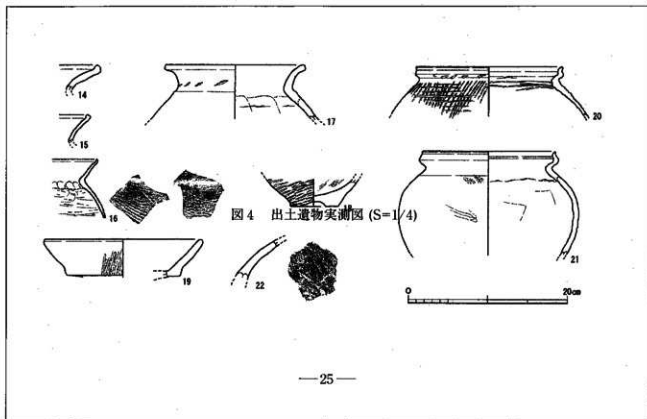
2005

天理市教育委員会

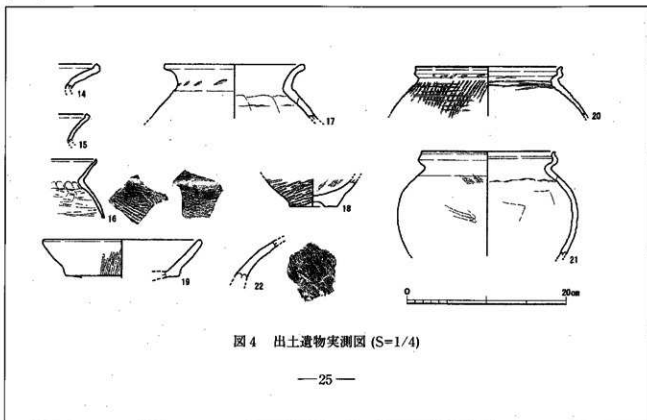
訂 正

P25 图4 出土遺物実測図 (S=1/4)

(誤)



(正)



例 言

1、本概要報告書は、天理市教育委員会が平成16年度に行った個人住宅建築に伴う緊急調査で実施した国庫補助事業による埋蔵文化財調査の概要である。

2、平成16年度に行った国庫補助事業に伴う発掘調査は次の通りで、調査地及び調査期間、調査担当者を列記する。

・柳本藩邸遺跡第9次調査	調査地：柳本町1240番地 調査期間：平成16年4月27日～5月14日	調査面積：20㎡ 担当者：松本洋明
・岩室西遺跡	調査地：岩室町369-1番地 調査期間：平成16年7月6日～7月9日	調査面積：32㎡ 担当者：松本洋明
・岸田遺跡	調査地：岸田町499-2番地 調査期間：平成16年9月13日～9月29日	調査面積：40㎡ 担当者：松本洋明
・平等坊・岩室遺跡第24次調査	調査地：岩室町307番地 調査期間：平成16年10月4日～10月25日	調査面積：30㎡ 担当者：青木勘時
・柳本藩邸遺跡第10次調査	調査地：柳本町1479-1 1479-2番地 調査期間：平成16年12月15日～12月29日	調査面積：60㎡ 担当者：青木勘時

3、発掘調査では、土地所有者を始め地元の方々から御協力をいただいた。また、発掘に際しては、平等坊・岩室遺跡第24次調査及び柳本藩邸第10次調査において、次の調査補助員の参加を得た。

石井里英（立命館大学学生・現美濃市教育委員会） 古田 陽（天理大学学生・現大分市教育委員会）
福家 恭・安原貴之・今井和代・島田智子（天理大学学生）

4、本概要報告書の作成は、調査担当者が行い、編集は、松本洋明が行った。

目 次

柳本藩邸遺跡（第9次）の調査 -----	1
岩室西遺跡の調査 -----	5
岸田遺跡の調査 -----	8
平等坊・岩室遺跡（第24次）の調査 -----	11
柳本藩邸遺跡（第10次）の調査 -----	21
写真図版（1～8）	

柳本藩邸遺跡の調査

(1) はじめに

天理市の南部、JR 桜井線柳本駅の東側一帯には柳本藩の陣屋跡を中心に城下町のなごりを留めた町並みが残っている。近年は、住宅の建て替えが進み伝統的な家屋も少なくなりつつある。柳本駅から東へ500mの所にある柳本小学校は、かつて藩邸屋敷が所在した場所で、校庭の周囲はコンクリート壁に様変わりしたが、柳本黒塚古墳を含めた内堀には石垣が残っており、藩邸時代の様子を偲ばせてくれる。藩邸屋敷に関する資料には、嘉永7年（1854）の近世末期に作られた「柳本陣屋絵図」が残されている。

これまでの調査では、絵図に残る藩邸屋敷の形状が近世末期に構築された城郭であること、この城

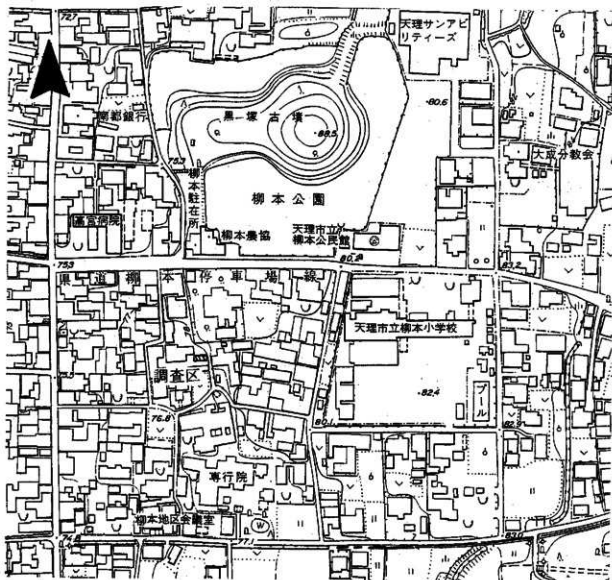


図1 調査区位置図 (S1/2500)

郭が文政13年（1830）から天保15年（1844）にかけて行われた藩邸の復興事業によってもたらされたこと、それ以前の陣屋は柳本黒塚古墳の南側（内堀）に谷地形が伸び城郭の形状もかなり異なっていたようだ。絵図に見る石垣は復興事業後のものである。

今回の調査は、柳本町1240番地の個人住宅の建て替えに伴う事前調査をおこなったもので、調査地点は柳本小学校の西方にあり陣屋絵図の西端、武家屋敷と城下の境目にあたる。



図2 柳本藩邸遺跡絵図（嘉永8年）

（2）調査の概要

a、調査区の設定

調査は陣屋絵図の西端を区画するヤブに隣接した所で、現在は住宅地などが立ち並び竹ヤブは残っていない。陣屋絵図のヤブにあたる部分の現状は南北に地割りが存在し、調査地点には高さ1mほどのコンクリート壁と幅50cmの水路が区画されている。調査地点はコンクリート壁の段下にある住宅地で、調査区を壁面付近から東西に直行する形で長さ6m、幅2mで設定した。

b、遺構

調査区の中央部から幅3mの大溝を検出した。調査区が狭いため大溝の底面までは掘り下げていない。この大溝は、陣屋絵図に見られるヤブ

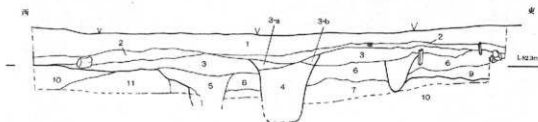


図3 調査区土層図（S1/40）

- 1、盛土 2、黒色土 3、淡黄灰色土（やや粘質） 4、黒灰色粘土（暗渠）
- 5、黒灰色砂質粘土（暗渠） 6、淡灰色粘砂 7、黒灰色砂質粘土（大溝）
- 9、暗灰色砂質土（やや粘質） 10、赤灰色砂土（硬い） 11、暗灰色砂質土

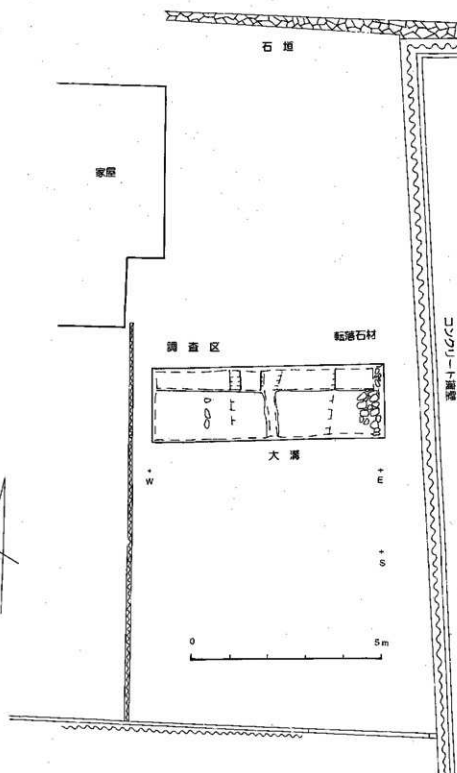


图4 調査区と位置図 (S 1/100)

との境目を区画する大溝の跡で、地割りと併行して南北に伸びていたものと思われる。大溝内部には、淡灰色粘砂（図3-6）や黒灰色砂質粘土層（図3-7）が見られ、水面を形成していたようだ。出土遺物は少ないが、土師皿や磁器などの破片が出土しており、近世末期から近代にかけての遺物を伴う。廃藩後も大溝が存在し、埋没後に暗渠を埋設し排水施設的なものとしていたようだ。また、調査区の東端から転落石が多数出土し、コンクリート壁で区画されている地割りが以前は石垣で区画されていたようだ。また、土層上部の盛り土直下から電線に用いる磚子が出土した。調査地点の盛り土が昭和初期頃になされたと思われる。

（3）まとめ

柳本藩邸を伝える陣屋絵図には、その周囲をヤブで区画している様子がわかる。今回の調査は、陣屋絵図の西端を区画するヤブに隣接した地点であった。調査では、ヤブと平行する大溝が出土し、陣屋絵図の西端にあるヤブの外側を大溝で区画していたようだ。

この大溝は廃藩後も存続し、昭和の初め頃まで溝の痕跡が残っていたようだ。また、ヤブと大溝との間に段差があり、転落石の出土から石垣で区画していたことが伺える。石垣が柳本藩の復興事業に際して準備されたものか、廃藩後の土地利用から造られたものか定かでない。

岩室西遺跡の調査

(1) はじめに

天理市の西部、岩室町の町並みがある西方に岩室西遺跡が所在する。岩室町には、弥生時代の大規模遺跡で知られる平等坊・岩室遺跡が平等坊町から岩室町にかけて所在し、岩室西遺跡は、その南西100mほどの所にある。位置的には、平等坊・岩室遺跡に関わる弥生時代の遺跡と推測されるが、同地域での調査例はなかった。

今回の調査は、岩室町369-1番地において個人住宅の計画があり、調査を実施したものである。

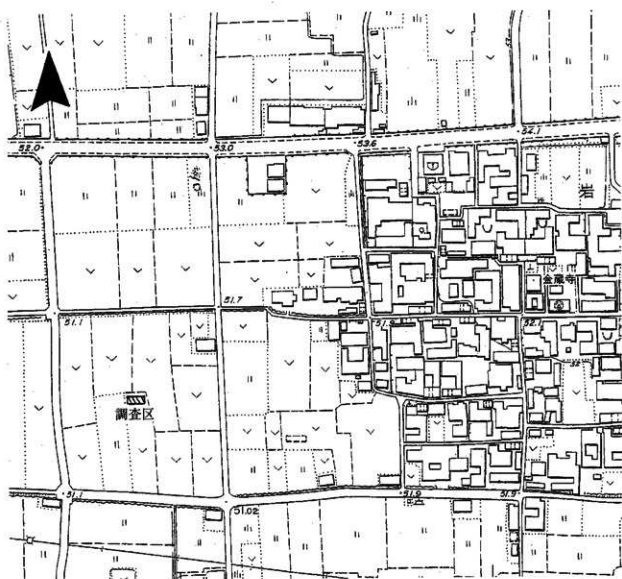


図1 調査区位置図 (S 1/2500)

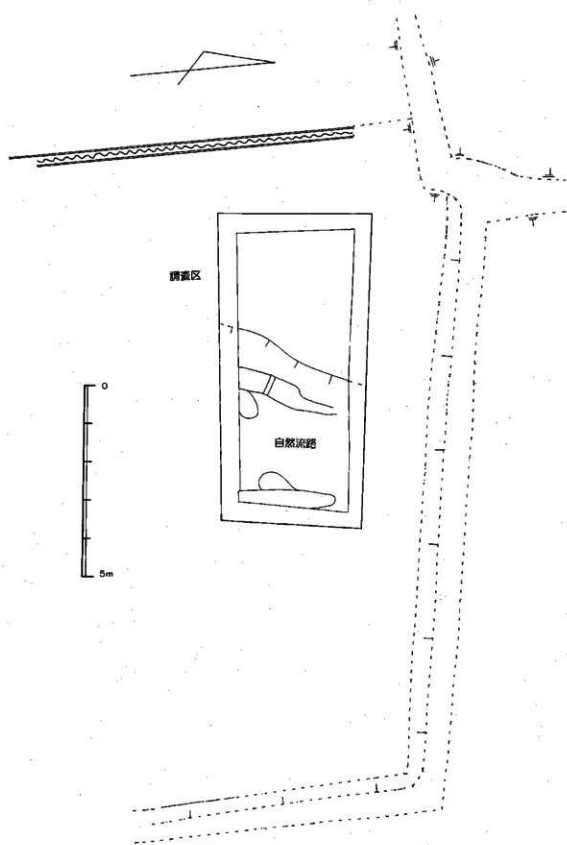


图2 調査区と位置図 (S 1/100)

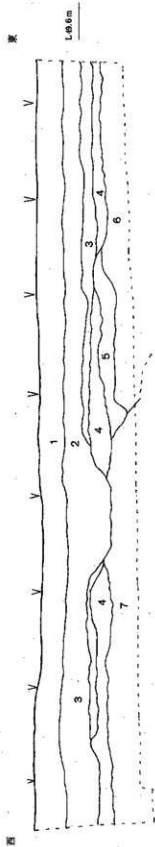


図3 調査区土層図 (S1/40)

1、暗青灰色土 (耕作土) 2、淡茶灰色土 (床土) 3、灰褐色粘質土
4、淡茶灰色粘質土 5、黒褐色砂質粘土 6、灰色砂 7、黒色粘質土

(2) 調査の概要

調査区は東西8m、南北4mで設定し、調査時点では耕作地の状態であった。作業では重機を使って耕作土及び床土以下60cmほど下位まで掘り下げをおこない、遺構の検出を実施した。地表面からおよそ60cm下位に淡茶灰色粘質土(図3—2)があり、遺物は認められない。その直下、地表面より90cm下位には黒色粘質土(図3—7)があり、遺物を伴わないが締まりがよく調査地点付近の基盤土層と思われる。調査の中央部から西側で黒色粘質土を面的に検出したが、東側では同層をベースにして砂礫層が広がり自然流路の跡を検出した。自然流路の規模は東端が調査区外となるため定かでないが、おびただしい砂礫層が出土した。この灰色砂層(図3—6)が堆積している西岸付近には黒褐色砂質粘土層(図3—4)がブロック状態で堆積し、同層中から縄文時代晩期(長原式)の小さい破片数点が出土した(図版3)。土器破片は少ないが、調査区から検出した砂礫層を伴う自然流路が縄文時代晩期頃に流れていたようだ。流路の流れは、北東から南西方向に向かっている。

(3) まとめ

岩室西遺跡の調査で縄文時代晩期の自然流路跡を検出した。晩期土器(長原式)を伴う生活遺構は出土していないが、土器破片を伴うことから付近には縄文時代晩期に関わる遺構が予測される。

岸田遺跡の調査

(1) はじめに

天理市の南部、龍王山の麓には織田藩の陣屋跡と城下町のたたずまいを残す柳本町があり、その市街地から北方200mに農家住宅を中心とした岸田町の町並みがある。岸田遺跡は、岸田町の東方にある古池、新池を中心とした地点に所在する遺跡で、本格的な発掘調査はこれまでに行われていない。

発掘調査は、個人住宅の建設による事前調査で、古池と新池に挟まれた場所である。付近の標高は68mで、地形的には龍王山麓の傾斜地にあたるが、調査地点は開発に先立って盛り土が施され、古池の堤と同レベル（標高69.6m）の状態まで地盤が高くなっていった。

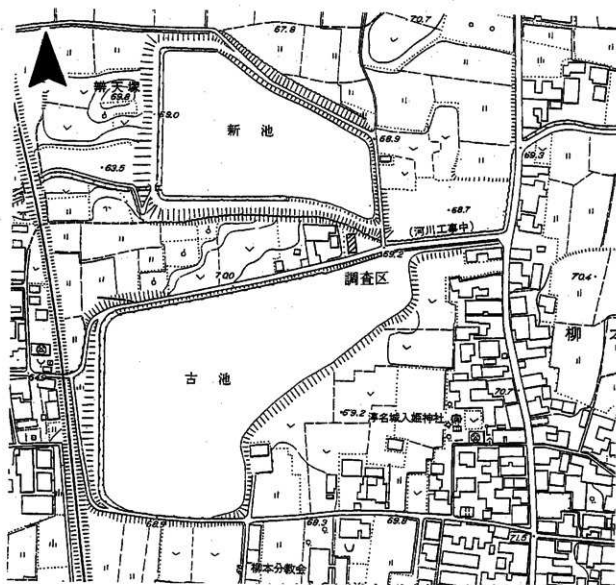


図1 調査地点位置図 (S1/2500)

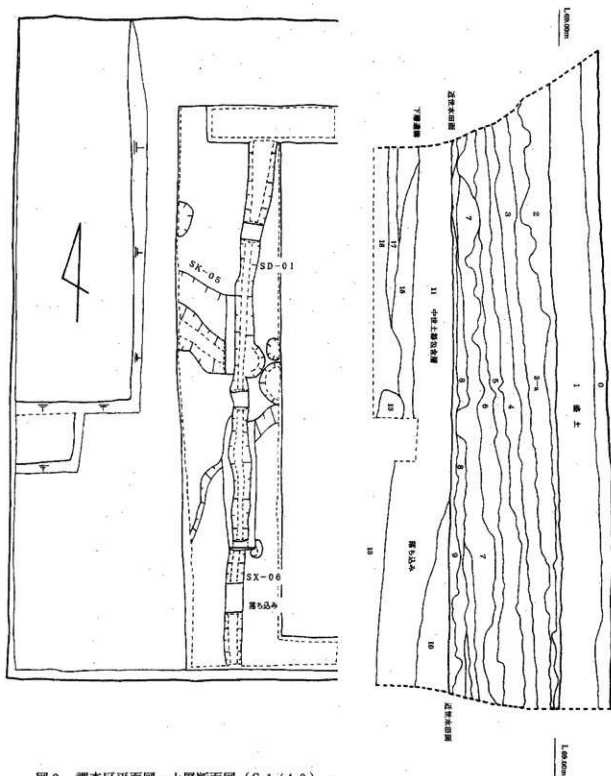


図2 調査区平面図・土層断面図 (S1/40)

- 0、暗灰色土 (表土) 1、黄褐色砂質土 (盛土) 2、暗青灰色土 3、明灰色粘質土
- 4、淡茶灰色土 5、淡茶灰色土 6、明灰色土 (やや粘質) 7、淡茶色土 (砂含む)
- 8、淡青緑色細砂 9、明灰色粘土 (水田跡) 10、淡青灰色土 11、淡茶色土
- 13、淡青緑色細砂 15、暗茶色土 17、灰色砂 (黑色粘土を含む) 18、灰色砂

(2) 調査の概要

調査地点に長さ7m、幅4mの調査区を設定し、重機にて掘り下げを行った。その結果、開発に寄る盛り土、古池の堤に伴う盛り土、盛り土の直下から近世頃の水田跡、水田跡よりさらに下部から平安時代頃の下層遺構が出土した。

a. 水田跡と古池の堤

調査区では、地表面からおよそ60cmほどの盛り土があり、工事前に土砂が搬入されていた。搬入土砂の直下、標高69mから標高67.8mの間に古池の北岸を構築した堤の盛り土(図2-3~8)が伴い。その直下から明灰色粘土(図2-9)による水田跡の土壌が認められた。同層位の上面には凹凸があり平面的には偶蹄類(牛)の足跡が伴う。水田面から磁器などの破片が出土しており、調査地点が近世頃までは水田地帯であったと思われる。調査地点の南側に隣接する古池が近世のある段階に堤防を構築し、現在のような形状になったようだ。

b. 下層遺構

水田跡の直下、淡茶色土(図2-11)から中世後期頃の土器破片が多数出土した。遺構は検出していないが土釜や土師皿などの破片が伴い、付近には中世後期の生活跡が存在している。

下層遺構は、さらに水田跡よりおよそ60cm下位で、溝や土坑などを検出した。遺物は少ないが、平安時代頃の土器破片が出土している。調査区に従って南に向かって遺構面が傾斜しており、現在の古池が谷筋状の地形をなし、調査地点から北側には尾根筋状の低い高地が広がっていたものと推測される。検出したSD-01溝は、傾斜に沿って南に延びている。調査区の南端で検出したSX-06は、地形形状の落ち込みを示す形跡と思われる。他に土坑やピットを伴い、調査地点にかけて平安時代頃には何らかの生活を示す遺跡が所在したようだ。

(3) まとめ

岸田遺跡の調査で、岸田町古池の堤防の構築が近世頃であったこと、堤が構築される以前は水田跡が広がり、古池が当時にも所在したとすれば、ため池の際まで耕作地が展開していたようだ。また、遺構は検出していないが、調査地点には中世後期(室町時代)の土器類が比較的目立ち、同時期の集落あるいは生活遺跡が存在したようだ。平安時代の生活遺跡を示す下層遺構は、近世の水田跡からさらに下部の地層中にあり、南に向かって傾斜した地形から溝や土坑などが認められた。古池に沿って谷筋地形があり、ため池はそうした地形に水利灌溉を行ったもので、近世以前は地形の北岸に遺構が展開していたようだ。

平等坊・岩室遺跡（第24次）の調査

I. はじめに

平等坊・岩室遺跡は、天理市中央部の布留川扇状地末端の沖積平野上に立地する弥生時代の拠点集落である。これまでに遺跡北半を中心に20数回におよぶ発掘調査が実施され、集落の出現から環濠集落の成立、発展の様相およびその終焉から古墳時代集落への転換に至る変遷過程が多くの遺構、遺物により確かめられている。

今回の調査は、これまで発掘調査の機会に恵まれることの少なかった遺跡南半部で実施した小面積の発掘調査である。現状の岩室集落内における個人住宅建て替えを契機として実施し、当初より遺跡南半部における弥生時代の遺構と遺物の在り方を追認する目的で調査を進めることとなった。

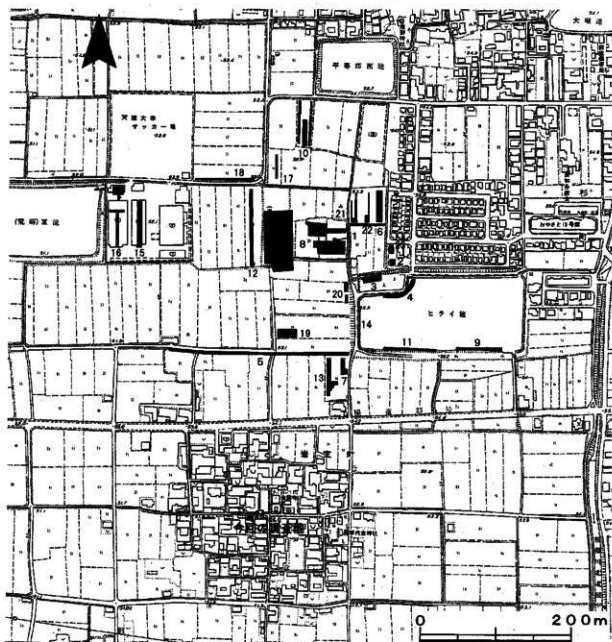


図1 今回の調査地とこれまでの調査地点 (S=1/5000)

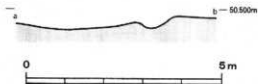
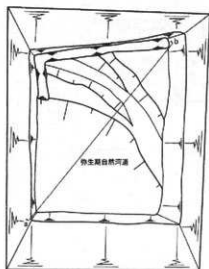
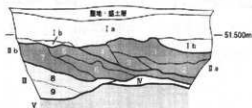
調査は、住宅建設地の前面において東西6m、南北5mの規模で調査区を設定し、重機による近現代の盛土、造成上等の上部層の掘削、除去の後、以下の堆積層をすべて人力により掘り下げつつ遺物包含層、遺構等の検出、確認に努めた。

現地における調査は平成16年10月4日より開始し、同月25日にすべての調査にかかる作業を終了した。総調査面積は30㎡であった。

II. 調査の概要

1. 基本層序

調査地は調査実施直前まで既存の本造家屋があったため、その建物解体後の整地に伴う盛土層を最上層として下位の遺構・遺物包含層の確認をおこなった。なお、本調査地における基本的な堆積層序は図に示した通りである。



第I層 10YR5/4にぶい黄褐 砂質土 (I a)
2.5YR4/3オリーブ褐 粘土 (I b)

第II層 1.10YR5/1褐灰 砂混じり粘質土
2.10YR6/1褐灰 砂混じり粘質土(砂質)
3.10YR4/1褐灰 シルト混じり粘質土
4.2.5GY5/1オリーブ灰
粘土ブロック混じり粘質土
5.N4/灰 粘土
6.5Y4/1灰 砂・粘土の互層
7.2.5Y3/1黒褐 植物層混じり粘質土

第III層 8.2.5Y3/1黒褐
細砂・シルト混じり粘質土～粘土
9.5GY4/1暗オリーブ灰 砂質土～細砂

第IV層 N4/灰 地山ブロック混じり粘土

第V層 5GY6/1緑灰粘土

図2 調査区平面・土層図 (S=1/100)

第Ⅰ層は建物解体後の整地・盛土層直下にある既存建物の旧整地土（Ⅰa層）および下部に部分的に残る人為的埋積にかかる堆積層（Ⅰb層）である。

次に、第Ⅱ層以下では粘質土を基調とした中・近世遺物の包含層が現地表面下1.8m付近まで堆積しており、調査区西壁土層断面の観察からは北側に傾斜堆積する状況が窺えた。また、平面的には調査区全域を占めるものの、層相から東西方向の大溝状遺構として捉えられるものであり、その堆積層は概ね上半（Ⅱa層）と下半（Ⅱb層）の二層に大別可能であった。それぞれの堆積層には異なる状況が見られ、下半（Ⅱb層）では底面直上に植物層堆積、その上位に砂と粘土の互層堆積となるのに対して、上半（Ⅱa層）では下位より粘土ブロック混じり粘質土、砂とシルトが混じる粘質土、砂質土と自然堆積による埋没過程が観察可能であった。以上のように第Ⅱ層は全体として遺構内堆積層として認識されよう。

続く第Ⅲ層および第Ⅳ層は第Ⅱ層の東西大溝遺構底面となるが、調査区北西隅にわずかに遺存する第Ⅳ層とその上面で検出された南西～北東方向の落ち込み埋土となる第Ⅲ層の堆積層とに区別される。第Ⅲ層は上部が細砂とシルトの混じる粘質土壌、下部～底面直上までに砂質土と細砂の堆積層に大別され、いずれの層にも弥生土器細片がわずかに包含されていた。また、水流を伴う小溝状落ち込みや全体的に底面付近の凹凸も看取されるため、弥生期の自然河道堆積の一角に該当するものと思われる。次に第Ⅳ層は地山ブロックの混じる粘土層でやや硬質な土壌を成し、実質的には弥生期の遺構面となる。

最後に、第Ⅲ層自然河道底面および第Ⅳ層ベース面直下に見えた第Ⅴ層は、還元粘土層の土壌となり完全に無遺物の基盤層となる。こうした状況は当遺跡内では通有な在り方となる。

2. 検出遺構

前項で詳述したように、今回の調査地については調査区内の第Ⅱ層以下第Ⅴ層（基盤層）上面までがすべて遺構埋土と考えられる状況となるため、それぞれの確認遺構の規模、平面形状等を把握することができなかった。従って、前述の基本層序による区分での各層位別の遺物採集により調査を進めることとなり、結果的に遺構としての認識に繋がる状況が確認されたのを根拠にまとめるものとした。以下、層序の記述との重複した内容も含みつつ各遺構の概観を示しておく。

大溝状遺構（溝）

基本層序の第Ⅱ層は北側に下降する東西方向の大溝（溝）埋土相当の堆積層となる。灰色粘土層の介在を境目に埋土の上下で層相が異なり、大溝状遺構の埋土としては上下二層に大別可能であった。遺物の出土状況も上半となる第Ⅱa層で中世末～近世前半の完形に近い日常雑器類を中心に多くの遺物出土が見られるのに対し、下半の第Ⅱb層では遺物量も少なく、小片が多くなる傾向が認められた。また、調査区北辺では現地表面下約1.8mで底面を確認しているが、対向位置となる南辺では緩やかな法面傾斜で上昇するため断面形状は皿状を呈するものと認識される。そして、調査区北西部で下位の第Ⅳ層が、ほかは後述の自然河道埋土となる第Ⅲ層の上面が底面を成していた。

自然河道

調査区の北西隅を除く大半の位置を占める状況で検出した流路である。流路の肩部と法面を成す北西隅の第Ⅳ層は実質的には地山相当層となるため、層位的に見ても当遺構が調査区内で最も時期が遡るものと理解できる。面的な拡がりについて不明であるが、調査区南東側には埋土となる第Ⅲ層の溝状の浅い落ち込みが連続し、北東～南西方向の河道となることが予測される。詳細な機能時期については明らかにでき

ないが、埋土より弥生中・後期の土器細片のみが出土することからほぼ弥生期の自然河道と捉えることができよう。

3. 出土遺物

調査では、コンテナ総数約16箱分の遺物が出土している。その大半は第Ⅱ層の大溝状遺構（濠）埋土の中世後期～近世の土器類や碗、箕、曲げ物等の木製品で占められ、わずかに弥生土器片が濠埋土の混入品として、あるいは第Ⅲ層の自然河道埋土より出土している。

ここでは大溝状遺構（濠）埋土の出土遺物を中心に、その遺物組成あるいは時間幅を提示できるように努めて図示した。以下、主要な遺物にのみ詳述し、出土遺物全体について概観するものとした。なお、その他法量等の詳細については観察表を参照されたい。

土師質土器類（1～28）

1～21は皿である。完形品が多く見られる。基本的にはキメの細かい黄白色系の胎土を使用するものが主体を占め、法量的には小型、中型、大型の三種が認められる。数量的な比率は低く破片のみに限定されるが、上げ底の形態で胎土、手法等の異なる中世末～近世初頭以前のもも含まれる。

22～27は土釜である。小型の24を除き、ほかは通有な大きさの中型品が主となる。口縁部形態的には二種の土釜が認められ、口径が小さく鋤部で最大径となるものと口縁部と鋤部の径が同等なものがある。

瓦質土器類（29～38）

28は土管である。同形態の破片は多く出土しており、屋敷地と濠との間の排水施設に使用されたと推定される。外面を粗いナメハケの後のナデで仕上げ、内面には多くの指頭圧痕が残される。

29～32はすり鉢である。破片資料を除き、ほとんどのものに注口部の片口が作り出されている。口縁部付近の形態、手法と外面調整の粗密の差により幾つかの形態差を見ることができる。

33～36は大型鉢である。おおくが破片で出土している。口縁部が短く屈曲外反し胴部の膨らむ、33、胴部から口縁部にかけてほぼ直立する、34、内湾気味に直立する35などの諸形態が見られる。いずれも底部は36のような平底で容量の大きな器となる。

37は短頸直口あるいは無頸の壺に飾耳の付された双耳壺である。外面をケズリ、板ナデ調整し、内面にヘラ状工具による掻き取り、指頭圧、ナデにより仕上げる。全体的に丁寧な作りの土器である。

38は土器片を再利用した円盤である。穿孔は無く、玩具として使用されたものと思われる。ほかにも大小様々な大きさのものが複数で出土している。

陶磁器類（39～56）

39～44は陶器茶碗である。内外面の釉の色調については凡例を示して図示したとおりである。39～43は肥前系陶器である。44の褐色釉のかかる天目茶碗と45の瓶子はいずれも瀬戸・美濃系陶器である。口縁部付近のみ図示した46の壺では、胴部および底部までの破片も出土しているが接合、図化し得なかった。外面にのみ灰釉がかかり、細かな別個体碎片や小石等の付着が顕著であった。これもおそらく瀬戸・美濃系陶器と思われる。

47・48はどちらも内面見込みに窯詰めの際の砂目積みの残る皿である。48には高台皿付にも溶結した砂の付着が見られる。いずれも灰色の釉が施され、形態等から唐津産の肥前系陶器と思われる。

49～55の磁器類はいずれも伊万里産の肥前系磁器である。54の碗を除いて、ほかはすべて調査地最上

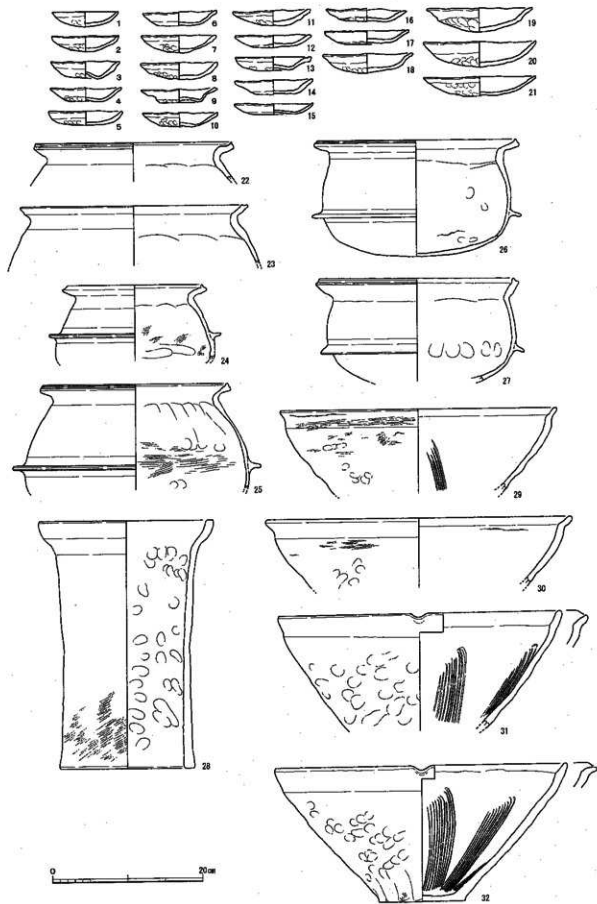


图3 出土遺物実測図1 (S=1/4)

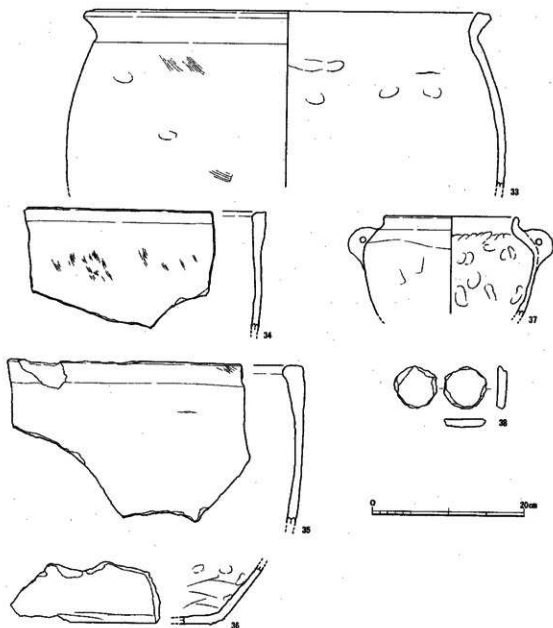


図4 出土遺物実測図2 (S=1/4)

面の整地土層より表面採集したものである。岩室村落の旧家の整地土層に含まれていたものと思われる。いずれも草花や竹、雨降り文等の文様から江戸期前半以後のものと思われ、濠出土の他の土器類より新しい様相を見ることができる。

第Ⅱ層上部出土の54の碗は濠の終焉時期を示すものと言える。また、第Ⅱ層下部出土の56の碗は外面無文であるが内面見込みには人物画図案が描かれ高台表面には「大明年製」の裏銘をもつ。他の磁器類に比して胎土や焼成も若干異質であり、出土層的に見ても古く見えるものである。近世初頭の輸入磁器あるいは初期伊万里の製品のいずれかであろう。

瓦類 (57)

57の巴文軒丸瓦の瓦当片も調査地上面の整地土層より採集したものである。文様形態からおそらく江戸期のものと思われる。なお、調査地近傍の旧家の屋根にも同種の瓦が現在も葺かれているのが見られた。

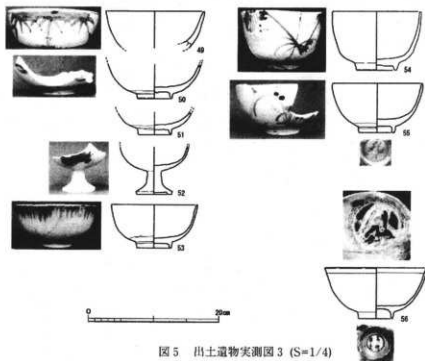
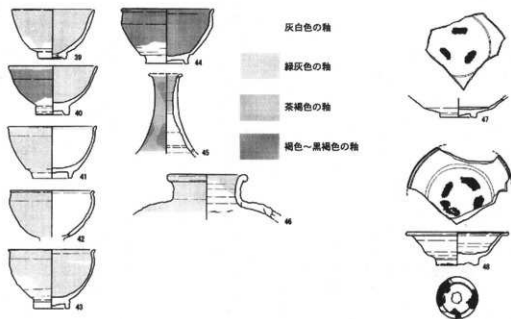


図5 出土遺物実測図3 (S=1/4)

木製品 (58~62)

58~62はいずれも内外面に漆塗りする挽物椀である。高台が低く小型の58、高台部分が中実の59、高台が高く見込みから高台表面の厚い60・61、高台が高くやや大きめの62など様々な形態と個別の特徴が認められるものがある。図示したものほかにも複数出土しているが、基本的に外面黒色、内面赤色の漆塗りが施される。

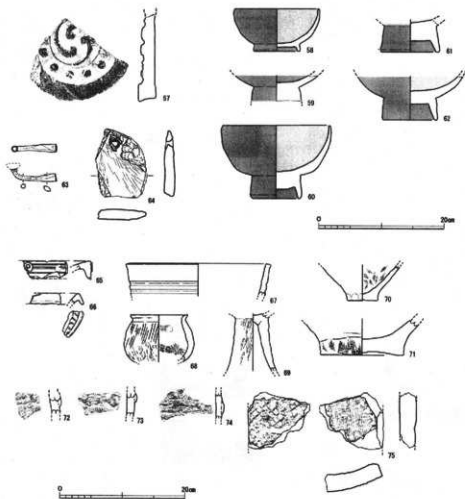


図6 出土遺物実測図4 (S=1/4)

金属製品 (63)

63は火皿の受け部を欠く煙管の雁首である。材質は真鍮である。

石製品 (64)

64は片岩あるいは粘板岩系の石材を使用した温石である。短冊状の板状石片面の表裏を研磨し、先端には吊り紐を通すための円孔が穿孔される。周縁には打ち欠き痕跡による剥離痕が多く残され雑な作りである。上端側面の不整形な形態から弥生期の石器石材あるいは成品の再利用品とも考えられる。

大溝状遺構(濠) 埋土混入遺物 (65~75)

65~71は弥生土器片である。中期後半~後期のもののみ出土している。

72~74は円筒埴輪片である。突帯部分の残るもののみ図示したが、ほかも数点の小片が出土している。埴輪片ではいずれも外面一次調整のタテ・ナナメハケ、内面ナデと共通した手法が看取される。いずれも古墳後期の埴輪である。

75は白鳳期の平瓦片である。外面に格子目叩き、内面布目圧痕が見られる。当遺跡北方の第8次調査地で確認した平等坊庵寺の瓦と思われ、前述の埴輪片とともに後世の土地開発の際に上砂とともに人為的に

もたらされたことが想定される。

Ⅲ. まとめ

今回の調査では、弥生拠点集落として知られた平等坊・岩室遺跡の集落南半部における初の調査であったため、当初は弥生期遺構面の検出確認が期待された。にもかかわらず、結果的には中世末～近世の大溝状遺構や、弥生期の自然河道等の検出から、わずかではあるが弥生期の遺跡景観と岩室村落の中世後期以降の惣村について偶然にも確認する結果となった。

具体的には、一部だけに留まるものの東西方向の大溝状遺構（濠）の存在が明らかとなり、中世後期～近世の村落内区画溝（濠）あるいは環濠屋敷地の濠に相当する遺構の遺存が想定され、村落内部の土地利用と地制の変遷の一端が知られた点が成果と言える。また、下層で確認した弥生期河道により岩室村落内の地下に広がる弥生集落の遺存についても追認された。

以上のように、今後も岩室村落内部での中・近世遺構の確認は可能と思われる。同様に弥生集落南半部の状況についても周辺部とともに詳細な状況が追認できよう。近年、遺跡北半より開発行為が増加しつつあり、南半の岩室村落に及ぶ可能性も無いとは言えない状況にある。それゆえに、今後も大小の開発行為に際して留意すべき点が増した遺跡と言えよう。

柳本藩邸遺跡(第10次)の調査

I. はじめに

柳本藩邸遺跡は、天理市柳本町所在の江戸期柳本藩の邸宅および付随した武家屋敷等を含む城下町一帯を指す遺跡である。これまでに10ヶ所において発掘調査が実施されており、当該城下町関連の遺構やその前身となる在り土家の平城痕跡、さらに下層の古墳前期集落の一端を知る材料の蓄積がなされている。

今回の調査は、当遺跡範囲の南西隅において個人住宅建設に伴い実施した確認調査である。発掘調査にあたっては、住宅建設予定地の前面に東西10m、南北6mの調査区を設定して実施し、藩邸関連遺構の検出、確認に努めた。現地調査は平成16年12月15日より開始し、同月29日にすべての作業を終了した。総調査面積は60㎡であった。



図1 今回の調査地とこれまでの調査地点 (S=1/5000)

Ⅲ. 調査の概要

1. 基本層序

調査地は調査実施の直前まで木造家屋があり、この建物解体後の整地土層を最上面として下位の遺構、遺物包含層等の確認をおこなった。以下、調査地における基本層序を記す。

第Ⅰ層は既存建物解体後の整地土層である。小石・粘土ブロックを多量に含むオリーブ褐色の砂混じり粘質土の人為的な堆積土層からなる。

次に、第Ⅱ層では第Ⅰ層に類似したオリーブ褐色の砂混じり粘質土となり、上面は近世末～近代の遺構検出面となっていた。これも同様に人為的堆積による整地土層である。

続く第Ⅲ層は、褐色～暗褐色の砂質土、砂混じり粘質土で上面が近世後半の遺構検出面となる。また、土層中には中世後期までの微細な土器片が包含される。

以下は下層確認トレンチのみの検出であるため面的な状況は把握していない。

第Ⅳ層は、調査区西端付近にのみ遺存する上部に褐色～暗褐色の砂混じり粘質土、下部が黄灰色の砂質土となる堆積層である。奈良・平安～中世後期の遺物を包含する。調査区西端のみに下降気味に偏在することから斜面堆積あるいは溝状遺構の埋土とも考えられる。

第Ⅴ層は、黄褐色～黒褐色の砂混じり粘質土、粘質土、砂質土で形成される堆積土層である。弥生後期末～古墳前期の遺物包含層となっており、底面での凹凸は遺構群の存在を示すものと思われるが、遺物採集に際しては一括しておこなった。

最後に、第Ⅵ層は黄灰色～黄褐色の砂混じり粘質土、シルト混じり粘土からなる地山相当の無遺物層であり西方あるいは南西方向に緩く傾斜する。調査区南東隅のみ下位の硬質な基盤層を確認している。

2. 検出遺構

第Ⅱ層および第Ⅲ層の上面で遺構検出面を確認しており、各検出面で土坑、溝、小穴等の多数の遺構を検出している。

第Ⅱ上面検出遺構上層遺構面

第Ⅱ層上面遺構検出面では、小規模な小穴、土坑が調査区の東寄りに密に検出され、その南側では調査区南辺に広がる大規模な攪乱土坑によって一角が破壊される状況であった。攪乱土坑に近接する土坑SK202は内部および周辺が被熱により焼けて硬質となっており、その状態と攪乱土坑出土の籠(カマド)関連遺物から本来この周囲が炊事施設の位置する場所であったことが推測される。なお、攪乱土坑には多量の瓦類とともに近現代のゴミも含まれていたことから、この場所にあった屋敷の解体に伴うゴミ穴として理解できる。遺構面の時期については、元の屋敷が廃絶するまでの時期幅を考えなければならないが概ね近世末～近現代の混在する遺構面と考えておきたい。

第Ⅲ上面検出遺構下層遺構面

第Ⅲ層上面遺構検出面では、調査地近辺の地割と合致した東西方向の大小の規模を示す溝SD301・302・303とこれらに直交する南北方向の2基の長方形土坑SK403・404、これらに先行する廃棄土坑SK302・401・402等を確認している。これらの遺構群からは中世後期の土器片を混在しつつ近世全般の時期に該当する土師器、瓦質土器、陶磁器等の遺物が多く出土しており、概ね近世後半の遺構検出面と考えられた。

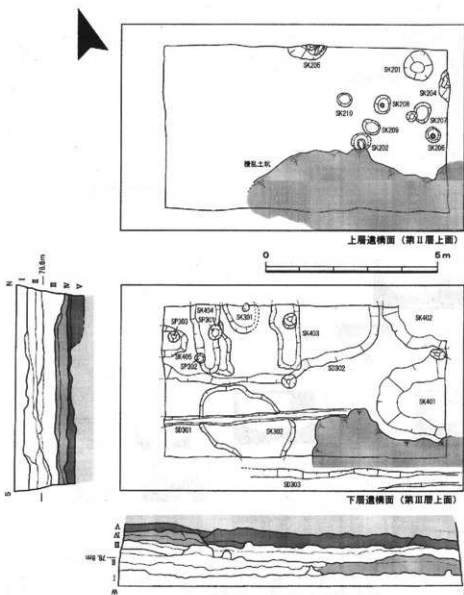


図2 調査区平面・土層図 (S=1/100)

3. 出土遺物

調査ではコンテナ総数約20箱の遺物が出土している。大半は近世以降の時期に帰属するものであるが、調査区西辺および南辺に設定した下層確認のための深掘りトレンチ掘削により第Ⅲ～Ⅴ層の下層遺物包含層からも各時期の遺物が出土している。

以下、出土物については図示したものを主体に概観し、その詳細は観察表にまとめておいた。

近世の遺物

1～13は第Ⅱ層上面の上層遺構面において検出した攪乱土坑より出土した土器群である。ほとんどが近世後半期以降に帰属するものである。

1は土師質皿である。白色系の精良な胎土を使用した灯明皿である。

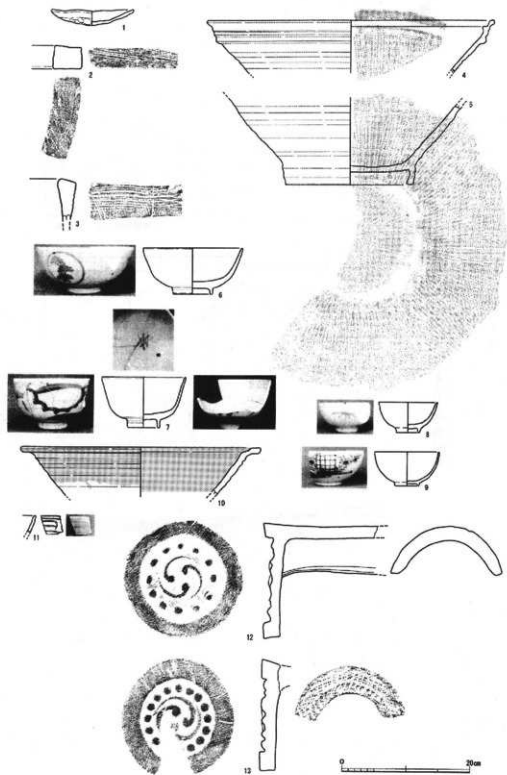


图3 出土遺物実測図 (S=1/4)

2および3は竈に関連する遺物である。2は竈上面での調理の際に使用される補助器具であり、焼成は瓦質である。3は竈本体の焚口に設置される筒状の壁体である。外面の節揃き文様は装飾の意図よりも菓などを混ぜた粘土で塗り固める際の密着度を高める意味で施されるものであろう。

4・5は信楽系陶器のすり鉢である。いずれもすり目の密度は細かく、見込み付近にまで隙間無く施される様子が窺える。別個に図化をおこなったがおそらく同一個体と思われる。

6～9は伊万里産の肥前系磁器である。若干の時期幅は認められるがほぼ江戸後半期のものであろう。

10は施釉陶器の鉢である。内外面には灰黄色の灰釉が施される。おそらく瀬戸・美濃系もしくはその模倣による在来産陶器である。

11は混入品と思われる中国産の輸入磁器片である。口縁部外面に巡る雷文帯の装飾を特徴とする。

12・13は巴文軒丸瓦の瓦当面の残る破片である。12は玉縁部を欠くほか残りは良好である。巴の先端が短く、殊文の数の少なさと外縁の幅の狭さから13の瓦片よりも古相を示す。13では殊文の配置が密で数も多く、他の特徴とともに新相の形態をもつ。表面には丸瓦との接合痕跡が剥離面に明瞭に残るものである。

近世以前の遺物

14～21は弥生後期後半～古墳前期初頭の土器片である。14・17は外反口縁の弥生後期型甕である。17のみ口縁部外面に連続したヘラ状工具圧痕による刺突が巡る。18の底部片も平底で叩き成型された弥生後期型甕である。15・16は庄内型甕の口縁部片である。15は短部のつまみ上げが顕著でありやや新相の形態を示す。16は典型的な庄内大和型甕である。

19・20・21は大和以東の外來影響による土器である。19の高杯はやや変容形態ながらも杯部形状、調整等で東海系の欠山式に類似する。20の甕はS字状口縁台付甕A類に分類される東海系土器でありおそらく搬入品と考えられるものである。21についても口縁部形状は類似するものの、胴部形態や調整面での違いが明瞭である。近江系の受け口状口縁が在地化したものとも考えられよう。これらの土器は総じて弥生後期でも末葉から古墳前期初頭に帰属が求められ、大和・柳本古墳群の形成基盤となる集落の拡がりを示す材料となる。

22は埴輪片である。朝顔形埴輪の口縁部片と思われる。外面に一次調整のタテ・ナナメハケ、内面には

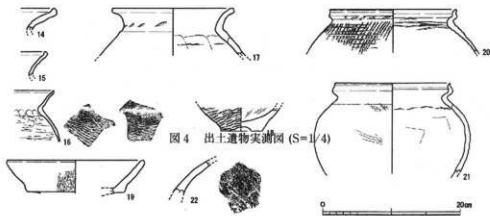


図4 出土遺物実測図 (S=1/4)

ナデで仕上げた古墳後期の埴輪である。

ほかにも図示しなかったが奈良・平安期の平瓦片等も出土している。

III.まとめ

今回の調査では柳本藩邸遺跡南西隅における弥生後期末～古墳前期、中世後期～近世・近代にかけての土地利用の変遷を確認することができた。調査地周辺では西向き斜面地形上に弥生後期末～古墳前期の遺物包含層が存在し、以後中世後期、近世前半期まで村落や屋敷地としての土地利用はされておらず、近世後半期の絵図に残る藩邸の段階に屋敷地としての確立が推定される。下層遺構面で検出した遺構群はその時期に該当する生活痕跡と考えられる。また、その後の近世末～近代にかけては屋敷地の中庭に相当する空地地となっていたためか遺構の密集は認められなかった。いずれにせよ、今回の調査地の南側および西側に面して斜面地や崖面による高低差が今も残り、その景観の完成以前からの自然地形を利用したものであることが確かめられたことが調査の成果といえる。

番号	器種	色調	胎土/焼成	法量(m)	残存率	出土地点	備考
1	土師灰皿	10YR6/3黄褐色	灰/灰好	口径10.2 器高2.0		第2層上段埋込土坑周辺	
2	瓦質土師-壺持助具	8Y4/1灰	灰/灰好			第2層上段埋込土坑	
3	瓦質土師-壺	7.5YR6/4橙	灰/灰好			第2層上段埋込土坑	
4	埴輪系陶器-すり鉢	8YR5/2褐色	灰/灰好	器口径20.2 器高6.6	1/8	第2層上段埋込土坑周辺	
5	埴輪系陶器-すり鉢	8YR5/2褐色	灰/灰好	口径15.6 器高1.8	3/4	第2層上段埋込土坑周辺	
6	埴輪系陶器-壺	7.5OYR7/1暗緑灰	灰/灰好	口径12.2 器高4.8 器高4.7	2/3	第2層上段埋込土坑周辺	
7	埴輪系陶器-壺	5B7/1暗黄灰	灰/灰好	器口径10.2 器高3.7 器高4.1	1/3	第2層上段	
8	埴輪系陶器-壺	5OY8/1灰赤	灰/灰好	口径7.2 器高2.6 器高3.7	2/3	第2層上段埋込土坑	
9	埴輪系陶器-壺	7.5YR/1灰赤	灰/灰好	器口径6.0 器高3.0 器高4.2	1/2	第2層上段埋込土坑	
10	埴輪系陶器-鉢	7.5YR7/4暗緑(黄)	灰/灰好	器口径20.8 器高5.8	1/8	第2層上段埋込土坑周辺	
11	輸入磁器-壺	7.5OY8/1緑灰	灰/灰好			第2層上段埋込土坑	外周に意文等文様
12	新瓦瓦	8Y4/1灰	灰/灰好			埋込土層断面第3層	
13	新瓦瓦	7.5YR/1黄灰	灰/灰好			第2層上段埋込土坑	瓦片断面に埋込痕跡
14	弥生後期土師	8YR7/4橙	灰/灰好			埋込土層断面埋込リレンテ(東)第3層	
15	注内型製(大和型)	7.5YR6/4橙	灰/灰好			埋込土層断面埋込リレンテ第3層	
16	注内型製(大和型)	7.5YR7/4橙	灰/灰好	器口径6.8		埋込土層断面埋込リレンテ(東)第3層	典型的な注内型製
17	弥生後期土師	10YR7/4C2灰黄	灰/灰好	器口径12.8 器高5.4	1/2	埋込土層断面埋込リレンテ(西)第3層	東向き影響の寛容形鉢か
18	弥生後期土師	7.5YR6/4橙	灰/灰好	器口径6.4 器高2.7	埋込土層断面第3層		
19	新瓦	8YR4/4橙	灰/中/灰好	器口径15.8 器高3.8	1/4	埋込土層断面埋込リレンテ(西)第3層	
20	5字状口縁壺	10YR6/3黄褐色	中/灰/灰好	器口径14.8 器高4.8	1/4	埋込土層断面埋込リレンテ(西)R0300	東海系
21	尖付口縁口縁壺	10YR6/3黄褐色	中/中/灰好	器口径12.2 器高10.0	1/2	埋込土層断面埋込リレンテ(東)第3層	近江あるいは東海系影響
22	埴輪	7.5YR6/4黄褐色	灰/中/灰好			埋込土層断面埋込リレンテ第3層	埋込土層断面の口縁

出土遺物観察表



調査区全景 (空撮)



落ち込みと石垣の転落石



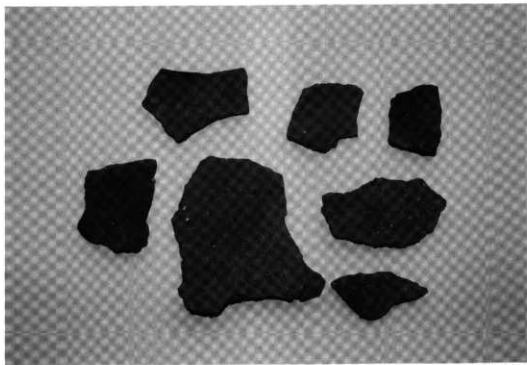
調査区全景（東方から）



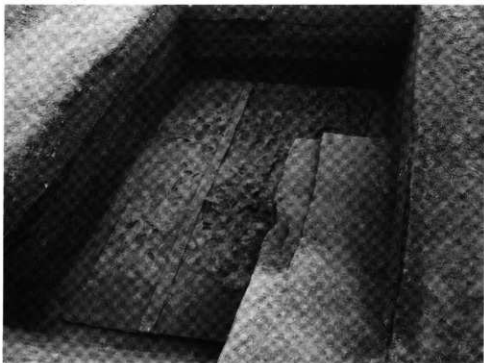
自然流路跡（東方から）



縄文晩期(長原式)破片・外面



縄文晩期(長原式)破片・内面



調査区水田跡全景（北方から）



下層遺構の検出（北方から）



下層遺構の掘り上げ（北方から）



調査作業風景（北西から）



環濠内の遺物出土状況
（北から）



環濠内出土の箕（南から）



環濠内の遺物出土状況
(西から)



調査区西壁土層断面
(東から)



調査区全景 (完掘後)
(西から)



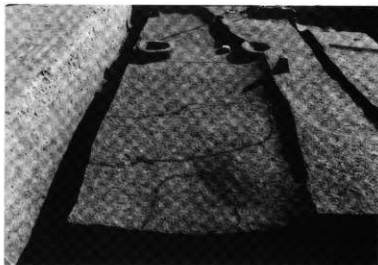
調査前全景 (南から)



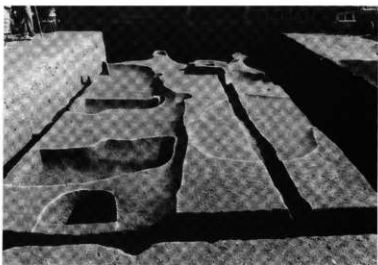
上層遺構面検出状況
(北東から)



調査区西壁土層断面
(北東から)



調査区北半
下層遺構面検出状況（西から）



下層遺構面検出状況
（西から）



調査区全景（南西から）

平成17年12月 ©

天理市埋蔵文化財調査概報

(平成16年度・国庫補助調査)

発行 天理市教育委員会
編集 天理市川原城町605番地
印刷 富光コピー株式会社
天理市橋本町2272-2